

「寛容性」の次元についての検討—「社会的寛容性」に焦点を当てて—

青山学院大学大学院 総合文化政策学研究所 一寸木英多良

1. 目的：

「寛容性(tolerance)」については、これまで約半世紀にわたり、アメリカを中心として、「政治的寛容性(political tolerance)」—「自分と異なる意見を持つ人びとに対しても、彼らの思想や言論に関する市民的自由を認めていこうとすること」(Mutz 2002)—に関する実証的な研究が行われてきた(たとえば Stouffer 1955, Sullivan et al. 1982 など)。これらは、いわば民主主義的な社会を運営していくための、「社会的ルール、手続き、約束」(真鍋 2013)としての「寛容性」といえる。

しかし、グローバリゼーションが急速に進展する現代社会においては、人びとは日常生活において、異なる文化的・歴史的背景を持つ他者と出会い、彼らを受け容れていくことが求められる。その際、人びとが「違うことは、危険なことである」(Hofstede 1991)という心を克服し、他者と共に生きていくためには、「政治的寛容性」とともに、それとは別の側面の「寛容性」—「社会的寛容性(social tolerance)」—が、これから重要になってくると考える。

これまで、「政治的寛容性」に比べて、「社会的寛容性」に関する実証的研究の数は少なく、両者の概念的、操作的な区分について、未だ十分な検討は行われていない。

そこで、本報告では、「政治的寛容性」と「社会的寛容性」という2つの次元の存在について、実証的に議論を展開することとしたい。

2. 方法：

- (1) 「寛容性」に関する実証的な先行研究における概念化と操作化についての整理。
- (2) 「政治的寛容性」と「社会的寛容性」という2つの異なる次元の存在を確かめるため、世界価値観調査(World Values Survey)のアメリカにおける調査データを使って、以下の方法により確認を行う。
 - ① これまでの先行研究で使われた「政治的寛容性」を測る質問項目と、「社会的寛容性」を測る質問項目の両方が入った相関マトリックスを作成。
 - ② これらの質問項目の因子分析を実施。
 - ③ 因子分析で抽出された質問項目のグループごとに、クロンバックの α 係数(信頼性係数)を確認。
- (3) 別々の次元であることが確認された「政治的寛容性」と「社会的寛容性」の質問項目は何を測っているか、それらによって「寛容性」以外の他の変数を説明できるかを確かめるため、以下の方法により確認を行う(構成概念妥当性の確認)。
 - ① 先行研究で示された、さまざまな変数と「寛容性」との関係性の命題を、ここでのデータ分析のために仮説として整理。
 - ② 仮説に基づき、さまざまな変数と、「政治的寛容性」「社会的寛容性」との関係性を探る。

3. 結果と考察：

- (1) 「政治的寛容性」を測る質問項目と、「社会的寛容性」を測る質問項目の因子分析から、両者は別々の次元であることが確認された。因子分析で抽出された「政治的寛容性」と「社会的寛容性」の質問項目のグループは、それぞれクロンバックの α 係数が許容可能なレベルに達していることが確認された。
- (2) 仮説に基づき、さまざまな変数と、「政治的寛容性」「社会的寛容性」との関係性を探った結果、「政治的寛容性」とのみ関係性が見られた変数と、「社会的寛容性」とのみ関係性が見られた変数がそれぞれ確認された。
- (3) 今後、構成概念妥当性の確認のための分析をさらに進め、「寛容性」を「政治的寛容性」と「社会的寛容性」という2つの次元に分けて検討することの有効性を探っていくたい。